

住宅建築

a monthly journal for home builders and designers

5

May '00

no. 302

構造がデザインを変える

[特集] これからの〈構造と住宅〉

池田昌弘／手塚貴晴+手塚由比／遠藤政樹／佐藤光彦／西沢立衛+アラン・バーテン
趙海光／海野健三／丹呉明恭

編集部室：〒107-0052 東京都港区六本木一丁目六番地
電話：(03) 5566-0326

循環型の住まいづくり
木と水をめぐる自然との対話
人と作品
新居眞和+新居ヴァサンライ



ネットとコンクリートで誰でもできる URC工法の“あたたかい”住まい

僕草庵

東京都江戸川区 写真=相原 功

設計=海野健三／海建築家工房 施工=直営



▲玄関周りをみると、上部には水をたたえた水盤があり、夜はライトアップされ、ゆらめく水の影が足下に投影されて人を誘い込む

▲(左上写真)北東側壁面／半年前の竣工当初はわずかに顔をのぞかせていた常緑のホワイトクローバーが生い茂る。夏に小さな白い花をつけるのが楽しみ。毎朝軒上部の自動灌水装置で、植栽用の多孔質セラミックを5~6cm敷き詰めた外壁に水を浸透させる。レッドパインの板塀は準防火地域内の木造住宅で2mを超える木製の塀は認められなかったが、木造じゃなければいいじゃないかと役所に主張して認められた

◀(左写真)玄関支柱上部／シワを寄せたというよりも“寄ってしまった”こと、ちょっと曲がった上部等、現場の手仕事が思い浮かべられるような跡を残す

◀(隣写真)玄関表札／七輪で焼いた建主の奥さんの作



▲(上写真) 室内から玄関廻りを見返す／ドアは、フラッシュドアに銅板を張り、科学薬品で緑青に。三箇所アクリル棒をはじめこんだ小さな穴から光が射し込む。玄関右手の靴入れの上の石板は端材を利用したもの。決して高級品ではないが、見てわかる、触ってわかる、ごまかしのない誠実な、本物の素材だけがこの家で使われている

▲玄関から2階への階段廻り(下写真)／階段の踏み板は厚30%のバーチクルボード。左手の板(洗面所上部)は床板を使つたがその木口をそのまま見せた。普通は木口は隠すものが見せてしまうことでかしこまらない楽な空間になった

►1階和室(右写真)／射し込む光が壁面に動きのある表情を与える。壺の下は建主さんが彩色した和紙をガラス板でおさえている。季節ごと、一日一日の太陽の高さで異なる表情の発見がある





▲居間から食堂を見る／決して広くはない食堂が、左右に配された庭と板塀の囲い込みにより、プライバシーを保つつつ狭いながらも開放的な空間となっている。大きな青森ヒバのテーブルは現場を担当した所員さんの手作り。二枚の板の間にガラスをはめこみ、ガラスの間に季節折々の紅葉などをしつらえる



▲居間壁面（上写真）／近くで見ると非常に肌理が細かく、とても暖かい。URCの壁は蓄熱が非常に高く、夏は夜間の冷熱を、冬は1階アトリエ床の集熱パネルから得る温熱をためるので、冷暖房はほとんど使っていない。音響的にも優れており遮音性が高く、大音響でコードをかけてもご近所迷惑はなし。

壁面と鉄骨の取り合い、また端部は切りっぱなしの布のようにアバウトに。ネットからどのようにコンクリートが出てくるか予測がつかなかつたので、結果がそのまま生かされた。このおかげでタタミ敷きの間2（左写真右下）など各所において、心地よくお行儀悪く振る舞える住まいとなっている。

とめられている丸型のオブジェは、壁面を布団に見たてた奥さんの手によるもの

▲2階台所（左写真）／上方の光が壁面にグレーチングの影を落とす。細くなったり太くなったり、濃くなったり薄くなったり。刻々と表情をかえる「光のゆらぎ」もこの住まいのテーマ。グレーチングの棚はビーコンの跡を利用してとめられている





◀ 2階階段廻りをみる／URCの壁、鉄棒の手摺、天井の和紙、左官壁、異なる素材が織りなす空間。手摺は現場で曲げた。これも錆止めは塗っていないが手の油でだんだんいい艶が出てきた



▲ 階段上方より居間を見下ろす／3本の鉄棒からなる手摺は、真ん中の1本が握り用で後の2本は遊び。この部分は3本に見えるが一筆書き。形ができるはじめる頃のあやうさ、これからどうなるかわからないという初々しさを表現した